

■書評 Book Review

「まぼろしの意識」まさぐる想像力

『Flying Pope 127 Haiku 空飛ぶ法王』Cyberwit.net
India 2008

Suketada SAKAI

酒井 佐忠

夏石番矢の新しい句集は『空飛ぶ法王 127俳句』である。インドの出版社「Cyberwit.net」からの刊行で、もちろん日本語と英語の対訳である。英語では『Flying Pope 127Haiku』。翻訳は夏石自身と、懇意のハイク詩人ジム・ケイシャンである。俳句は世界の詩型であることを深く認識し、海外にはばたく夏石の情熱を象徴するかのように紅く染められた空を背景に大きく羽ばたく翼。コンパクトではあるが、際限なく想像力を内包するような装丁が早くも「夏石ワールド」を暗示する。「もう、日本語だけの俳句の句集は価値が薄い」という夏石の刺激的な発言を思い出す。日英対訳句集は、彼にとつては最早、当然の成り行きなのだろう。それにしても「空飛ぶ法王」とは、いかにもイメージを飛翔させる言葉ではないか。

夏石がいつから「空飛ぶ法王」に魅せられたのか。残念ながら私は確かなデータを持っていない。ただ二〇〇三年の『文藝春秋』8月号に「空飛ぶ法王」と題する作品が掲載され、その後ラトビア版に「60人の空飛ぶ法王」が紹介されているという。昨年の『俳句研究』7月号に「50人の空飛ぶ法王」が一挙に発表されたのは記憶に新しい。するとこの比喩力もイメージ飛翔力も抜群に豊かで滑稽でもあるキーワードが彼の想念の中に浮かんだのは、きのうきよ

うのことではない。少なくとも二一世紀になって間もなく、まぼろしの空をはばたく「法王」が常に彼の胸中に内在し、その「法王」は、すでに荒廃しつくした原野を微笑交じりに見据えていたのである。現実の「空飛ぶ法王」がこの世を去った後も、彼の内なる「法王」がまぼろしの空（と再び書いていま、あの飯島耕一の名詩「他人の空」が浮かんできたのだが）を飛翔し続けているのは当然のことである。

巻頭の一句は「うぶすな忘れ祈り忘れて空飛ぶ法王」である。この巻頭句に象徴されるものは何か。自らがよって立つ産土も、宗教精神に裏付けされた世界宗教としての祈りも、とうの昔に忘れ去り、俗世の栄華をむさぼり続けるのは果たして「法王」自身なのか。それともここで俳句に特有の「切れ」が作用して、二一世紀を生きる私たちに向けての警句になっているのか。おそらく後者に違いはないが、なにごとくも「忘れ」去ることにかけては人後に落ちない私たちに對し、巻頭句は鋭い刃を向け、この一卷に通底する「現世批判」の序奏と読むのは深読みか。

俳句に「時事詠」は可能かどうか。かつてそんなことが論議されたことがある。時事を素材にすることは俳句の価値を貶めるといふような風潮もあった。だが、この作品群のいくつかには、人の意識の底に眠る「出来事」への深層に對する確かな、信頼できる眼差しを見つけることができる。「摩天楼のあいまの空を飛ぶ法王」「天安門で空飛ぶ法王フリーズ」「イラクへと大きな頭で空飛ぶ法王」「竹藪のなかに戦争空飛ぶ法王」「摩天楼」と聞くとどうしてもあの「9・11」を思い浮かべる。「まぼろしの空」とはいえ、

超高層ビルで区切られた狭い空をさまよう「法王」は、いつしかテロリズムの誘惑に自らを変身させているかもしれない。「竹藪 II Bush」の句に諧謔を読み取るのは簡単だ。ここで夏石は単に「時事」を眺めているだけではない。あくまでも世界的視野と俳句の關係に思いを馳せているだけだ。だが、「空飛ぶ法王」の真骨頂は、これらの意味性の勝つた句にあるのではない。いみじくも句集の序文でノルウェーの詩人、アダム・ドナルドソン・パウエルが述べているとおり、「まぼろしである意識」を呼び覚ますような作品群にこそ魅力を感じる

ランボーのさすらいは円 空飛ぶ法王

子供とキリンにだけ見えている空飛ぶ法王

法王が空飛ぶ理由は「露さ」

空飛ぶ法王てのひらにあるマンホール

オーロラが別れに揺れて空飛ぶ法王

空飛ぶ法王涙は真珠となりて落つ

まぼろしの虚空に満ちる飛ぶ法王

虚空の上の別の虚空を飛ぶ法王

「法王」はあたかも砂漠に消えたランボーのように空をさまよう。しかしランボーは決してそのまま姿を消したわけではない。彼が発した詩の言葉は、約一三〇年を経た現在も私たちの心をとらえて離さない。ランボーは円を描き、循環する。「俺は夏のあけぼのを抱きしめた。」(鈴木和成訳)と二十歳の夏、『イリュミナシオン』に書いたランボー。その言葉のように「法王」もまた循環する。空の上から「夏

のあけぼの」を幻視する。だが「法王」は孤独だ。少壮の詩人が「見ることによつて見ることの不可能性」を知ったように、上空からあらゆるものを見据える超越的視線のゆえに、「法王」は孤独をかみしめる。わが手に存在するブラックホールを知っている。はかない「露の世」であるからこそ一層、生命を潤す露の清純な力を知っている。やがて砂漠ではないまぼろしの空(虚空)に姿を消しても、永遠に見ることの驚きをもち続ける「子供とキリン」にだけは、その姿をはつきりとらえることができるのだ。

再びパウエルの序文に触れる。彼は「夏石番矢のこの作品のほんとうの芸術手腕は、画家はだしのフレスコ画俳句の連続であろうし、『まぼろしである意識』という同じテーマの、すべてのバリエーションであろう」と指摘する。フレスコ画とは西洋の壁画に特徴的な堅牢な技法。重ね塗りをするように夏石の俳句もイメージあるいは「まぼろしである意識」が重層する。そう、イメージの重ね塗り。あるいはイメージの重層性。一句一句が重ねられるようにしてこの一巻が出来上がる。この句集を特徴づけるものはまさに「まぼろしの意識」の重層性にあるのかもしれない。それを可能にしているのはもちろん、「空飛ぶ法王」というキーワードである。

それでは肝心の「空飛ぶ法王」とはいったい何者なのか。当然のように考えられるのは現実の法王。二〇〇五年四月二日、永遠の眠りについたローマ法王のヨハネ・パウロ二世である。在位二六年、その間一三〇国以上の国を訪れ、現実には「空飛ぶ法王」と称された。東欧の民主化に貢献し、アルメニア、イスラエルなども訪ね、異宗教との融和も試

みた。だが、偉大な宗教者であるとともに、大カソリックの絶大な権力者であったことも否めない。異教徒とは何を指すのか。何に對する異教であるのか。現実の法王はキーワードの「空飛ぶ法王」に転化して、さまざまな想像力をエンジンに虚空を飛んでいく。

ひよつとしたら「空飛ぶ法王」は、世界俳句の実現を指して空を駆けめぐる夏石番矢その人であるかも知れない。「禿山多きマケドニアの空飛ぶ法王」「無季俳句空飛ぶ法王朗読す」。こんな句もあった。さらにいえば「千年杉に謝罪している空飛ぶ法王」の句。これはひよつとしてかつて夏石が句集『楽浪』で描いた異教（異境）としての「熊野」のことではないか。「ふりかぶれ熊野の鬱の蟬の秋」「峯々は八弁蓮華健次亡し」「満月を骨で迎える熊野びと」「楽浪」中の「熊野讚句」。そうか、「空飛ぶ法王 (Flying Pope)」を「中上健次 (Kenji Nakagami)」と言い換えてもいい。中上もまた熊野から朝鮮、ニューヨークへ、虚空をまさぐるような苦しい旅をしたのだ。

いま私は、二〇〇一年に刊行された『越境紀行 夏石番矢全句集』のしおりに書かれた四方田犬彦の言葉に立ちどまる。世紀末の夏石の詩業に触れて、「ひとたび降り立った深所から熊野や出雲へ、そして古代朝鮮からアジア全域へと、神々を訪ねて歩く過程であった。その歩みの副産物として、俳句を世界のポエジーとして作ってゆこうという、番矢の組織論が立ちあがったことは、考えてみれば論理的帰結かもしれない」。四方田はそう書いている。「空飛ぶ法王」はどこかに悲しきユーモアとアイロニーを湛えているのだが、その底には古代から連綿と続く名もなき神々への

心寄せが見てとれる。夏石はいま現在もその神々を訪ねて『地球巡礼』（第八句集）の旅を続け、その結果の一つの変奏曲としてさらに想像力をかき立てる「空飛ぶ法王」が生まれたのだろう。

一方、「世界俳句」を目指す夏石にとって俳句はすぐれた言語装置であるという考えがある。「俳句は、部分的整理的情報を託す短詩型などではなく、一見すきまだらけの、不完全な部分的表現でありながら、個人をも、他者をも、非生命をも、そして宇宙全体をも生動させているエネルギーを放出させる言語装置」（『世界俳句入門』）であるという。この世界で最も短い詩型は無季・有季の次元を超えた限らない時間と想像力を内包する言葉の集積回路であるという考えは、これまでの凡庸な俳句観に大きな揺さぶりをかけるものだ。その上に「世界俳句」の道が開けてくる。不可視なもの、直観的なもの、靈的なもの、宇宙的なもの、そうしたものに対する研ぎ澄まされた想像力を働かせていくと、彼のいう「創造された幸福な呪文」（同）も生まれる。「空飛ぶ法王」もその呪文の一典型ということが出来る。

「俳句はもはや、日本人や日本語の独占物ではなく、世界的に広がる、普遍的な短詩となりつつある」（同）と夏石は認識する。その考えは一貫し、画一化と平準化、さらにいえば幼児化さえした俳句の舞台から、はるか遠くに飛翔し続けている。間もなくこのインド版とは違う第一句集『空飛ぶ法王 161俳句』が刊行されるという。このシリーズの完結も近いのかと想像するが、夏石はまた新たな地球の舞台を求めて空を飛ぶに違いない。まぼろしの意識をまさぐる想像力は無限に広がっているからだ。（了）